



現代日本の社会文化と経済

# 现代日本

## 社会文化与经济

游衣明 刘笑非・主编



东南大学出版社  
SOUTHEAST UNIVERSITY PRESS

# 现代日本社会文化与经济

|     |     |     |
|-----|-----|-----|
| 主 编 | 游衣明 | 刘笑非 |
| 副主编 | 段克勤 | 范婷婷 |
| 编 者 | 马 力 | 孙道凤 |
|     | 干保柱 | 周 萌 |

东南大学出版社

· 南京 ·

## 内 容 提 要

本书由浅入深,既全面系统地介绍了日本传统文化,又用较大篇幅涉及了现代日本社会和经济,如日本现代的餐桌文化、企业文化及现状、日本的环境问题等。日本社会文化部分包括日本传统文化、日本近现代的衣食住行、生活习惯、风土人情及日本的世界遗产等。日本经济部分包括日本战后经济的发展和现状、日本雇佣情况、日本企业及环境问题。内容详实,涵盖面广。各章内容包括引言、正文、小结和思考题,每章后面还附有相关的小知识。在保证概念准确性的前提下,尽量使有关阐释深入浅出、清晰易懂。本书既适用于教师教学,又适用于日语专业学生和具有一定日语基础的读者自学,同时也可作为相关测试等的参考用书。

## 图书在版编目(CIP)数据

现代日本社会文化与经济 / 游衣明, 刘笑非主编.  
—南京: 东南大学出版社, 2015. 7  
ISBN 978-7-5641-5754-8

I. ①现… II. ①游… ②刘… III. ①日本—概况  
IV. ①K931.3

中国版本图书馆CIP数据核字(2015)第108350号

## 现代日本社会文化与经济

|      |                                                                            |       |                     |
|------|----------------------------------------------------------------------------|-------|---------------------|
| 主 编  | 游衣明 刘笑非                                                                    | 责任编辑  | 刘 坚                 |
| 电 话  | (025)83793329/83362442(传真)                                                 | 电子邮箱  | liu-jian@seu.edu.cn |
| 出版发行 | 东南大学出版社                                                                    | 出 版 人 | 江建中                 |
| 地 址  | 南京市四牌楼2号                                                                   | 邮 编   | 210096              |
| 销售电话 | (025)83794561/83794174/83794121/83795801/83792174<br>83795802/57711295(传真) |       |                     |
| 网 址  | http://www.seupress.com                                                    | 电子邮箱  | press@seupress.com  |
| 经 销  | 全国各地新华书店                                                                   | 印 刷   | 南京玉河印刷厂             |
| 开 本  | 700mm × 1000mm 1/16                                                        | 印 张   | 13.75               |
| 字 数  | 280千字                                                                      |       |                     |
| 版 次  | 2015年7月第1版                                                                 |       |                     |
| 印 次  | 2015年7月第1次印刷                                                               |       |                     |
| 书 号  | ISBN 978-7-5641-5754-8                                                     |       |                     |
| 定 价  | 28.00元                                                                     |       |                     |

\* 未经许可,本书内文字不得以任何方式转载、演绎,违者必究。

\* 本社图书若有印装质量问题,请直接与营销部联系。电话:025-83791830。

# 前 言

日本是我们的近邻,清代学者黄遵宪曾用“只一衣带水,便隔十重雾”来形容中日两国之间的关系。对于我们的邻国,我们有必要从基本的地理、历史、文化以及经济等全方面进行了解和把握。

目前国内出版的有关日本概况方面的书籍不少,且多从地理、历史方面入手介绍日本相关情况,而本书在广泛收集日本和国内最新资料的基础上,着重并深入介绍现代日本的社会文化与经济等方面内容,其中也贯穿着一些历史发展的脉络。全文采用日语编写,在地名、人名等专有词语以及难字上标有假名读音,适合日语专业二、三年级学生使用。同时,本书还插配了大量的图片和图表,在丰富的文字内容基础上,读起来更加直观形象,有利于读者快速地理解和掌握所学知识。

本书在编写过程中考虑到一般大专院校开设“日本概况”、“日本经济”等课程的课时情况,尽可能地将大量的知识压缩到一学期内能完成的程度。这样,给日语专业的学生和有一定日语基础的读者提供了多领域的背景知识,既增进他们对日本国家、日本社会文化和日本经济情况的理解,也开阔了他们的视野、扩大了知识面,从而对日本社会整体有一个较全面的感性认知,加深对我们近邻的理解。

由于时间和水平有限,书中肯定存在诸多缺点和不足,敬请各位同行和专家批评指正。

编者

2015年6月

# 目次

---

## 第一部分 日本の社会文化

|     |             |     |
|-----|-------------|-----|
| 第一章 | 伝統文化        | 3   |
| 第一節 | 年中行事        | 3   |
| 第二節 | 芸術芸能        | 24  |
| 第三節 | 伝統芸能        | 42  |
| 第二章 | 服装文化        | 58  |
| 第三章 | 食文化         | 73  |
| 第一節 | 日本料理        | 74  |
| 第二節 | 日本に根付いた外国料理 | 76  |
| 第三節 | 現代の食卓       | 77  |
| 第四節 | 代表的な日本料理    | 78  |
| 第四章 | 住文化         | 88  |
| 第一節 | 日本の家屋       | 88  |
| 第二節 | 日本建築        | 95  |
| 第三節 | 日本庭園        | 99  |
| 第五章 | 生活風俗        | 106 |
| 第一節 | 日本の祝日       | 106 |
| 第二節 | 日本の慣習       | 113 |

|     |                             |     |
|-----|-----------------------------|-----|
| 第三節 | 日本の <sup>しゅうきょう</sup> 宗教    | 126 |
| 第六章 | 日本の <sup>せかい いさん</sup> 世界遺産 | 131 |

## 第二部分 日本の経済

|     |                                                             |     |
|-----|-------------------------------------------------------------|-----|
| 第一章 | 戦後の日本経済                                                     | 145 |
| 第一節 | 経済の <sup>みん しゅ か</sup> 民主化と復興 <sup>ふっこう</sup> (1945 ~ 1954) | 145 |
| 第二節 | 高度経済成長(1955 ~ 1973)                                         | 150 |
| 第三節 | 安定成長期(1973 ~ 1986)                                          | 153 |
| 第四節 | バブル経済(1986 ~ 1991)                                          | 156 |
| 第五節 | 日本経済の現状(2002 ~ )                                            | 163 |
| 第六節 | 経済と産業の概況                                                    | 165 |
| 第二章 | 日本的雇用                                                       | 177 |
| 第三章 | 日本企業                                                        | 189 |
| 第四章 | 環境問題                                                        | 201 |

# 第一部分

## 日本の社会文化

この部分では、おもに日本の伝統文化(年中行事、芸術芸能、伝統芸能)、衣・食・住、生活風俗(日本の祝日、慣習、宗教)および日本の世界遺産について概観する。

「和」という言葉が日本文化の特徴を示す概念として、屢々用いられる。日本の伝統文化は、神道を基軸として、外来の文化を取り込みながら、時代とともに変遷してきたが、表面的に大きく変化していても、その中に一貫する極めて日本的な要素や傾向が見える。



# 第一章

## 伝統文化

本章では、日本の年中行事、芸術芸能、伝統芸能を紹介することによって、日本の伝統文化を概観する。

### 第一節 年中行事

年中行事<sup>ねんじゅうぎょうじ</sup>は、毎年特定の時期に行われる行事の総称である。狭義<sup>きょうぎ</sup>では伝統的な事柄<sup>きぎょうちゅう</sup>、特に宮中<sup>きやうちゅう</sup>での公事を指すが、広義<sup>こうぎ</sup>では個人的な事柄から全国的・世界的な事柄なども含まれる。

#### 1.

#### しょうがつ 正月

「正月」とは、本来1月の別名だが、祝う期間は通常一月一日から三日まで、または1週間で、日本人には最も重要な行事なのである。学校も企業も1~2週間休みとなり、家族と離れて暮らしている人の多くも、帰省<sup>きせい</sup>して家族と一緒に過す。正月を迎えるにあたっては大掃除<sup>おおいそうじ</sup>をし、門松<sup>かどまつ</sup>やしめ飾り<sup>かざ</sup>、鏡餅<sup>かがみもち</sup>の準備<sup>おおいみそ</sup>をする。大晦日<sup>おおいみそ</sup>の夜には寺<sup>じ</sup>で除夜の鐘<sup>じよ</sup>が鳴らされ、年越<sup>としこ</sup>しそばを食べて新年を迎える。和服<sup>わふく</sup>を着ることも多く、元旦<sup>じしや</sup>には寺社<sup>じしや</sup>へ初詣<sup>はつもうで</sup>に行<sup>い</sup>って新年の健康と幸福を祈る。年賀状<sup>ねんがじょう</sup>に目を通

すことや、子どもにとってはお年玉<sup>としだま</sup>をもらうことも、正月の楽しみの1つである。

1月1日を元日、元日の朝を元旦<sup>がんたん</sup>と呼ぶ。元日は国民の祝日となっているが、官公庁は12月29日から1月3日までを休日としており、一般企業でもこれに準じていることが多い。このため、公共交通機関はこの期間中は平日も含めて休日ダイヤで運行する。一方、小売業<sup>こうりぎょう</sup>では、1980年代前半までは松の内<sup>まつうち</sup>(関東)の頃(1月5~7日)まで休業していた店が多かったが、24時間営業のコンビニエンスストアの登場などの生活様式の変化により、開店日は早くなり、1990年代以降は元日のみ休業し、翌1月2日から短時間体制での営業を始める店が多い。大型店など店舗<sup>てんぽ</sup>によっては、短時間体制ながらも元日も営業することも多くなった。ほとんどの場合は1月4日ごろから平常営業に戻る。

正月には前年お世話になった人や知人などに年賀状を送る習慣があり、お年玉つき年賀はがきの抽選日までを正月とする習慣も多い。元来は年の初めに「お年始」として家に挨拶に行ったり、人が訪ねて来たりするはずのものが簡素化されたものとも言える。現在携帯電話が普及したこともあり、年賀状でなくメールなどで済まされることが多くなってきている。また、新年最初に会った人とは、「あけましておめでとう(ございます)」という挨拶が交わされる場合が多い。

日本の(お)正月には、現在でも残っている伝統的な習慣やしきたりが幾つかある。例えば、正月飾りを飾ったり、家族でお節料理<sup>せちりょうり</sup>を食べたり、初詣<sup>はつもうで</sup>に行ったりする。

## 2.

### 正月に関連する項目

正月には、正月用の飾り付けをするが、この飾り付けは前の年の暮れまでに済ませておくのが一般的である。たいがい、どこの家の前にも入り口の門の両脇には門松<sup>かどまつ</sup>や松飾り<sup>まつかざ</sup>が飾られ、玄関の扉<sup>とびら</sup>や扉の上などには注連縄<sup>しめなわ</sup>や注連飾り<sup>しめかざ</sup>が付けられる。

神様へのお供えに、丸い餅を重ねた鏡餅<sup>かがみもち</sup>を飾り、これは後で1月11日の鏡開き<sup>かがみひら</sup>の際に、手や槌<sup>て</sup>で小さく割り砕<sup>くだ</sup>いてから、調理して食べる。

# ▶▶ (1) 門松

門松とは、松の枝を組み合わせて作った飾りに竹や梅が添えられたもので、正月に家の門の前などに立てられる一対になった松や竹の正月飾りのことである。松飾りともいう。日本では松竹梅は縁起がよいとされており、特に松は古来、長寿を意味するものとして尊ばれてきた。古くは、木のこずえに神が宿ると考えられていたことから、門松は年神を家に迎え入れるための依り代という意味合いがある。地域の言い伝えにより松を使わない所もある。

新年に松を家に持ち帰る習慣は平安時代に始まり、室町時代に現在のように玄関の飾りとする様式が決まったと言われる。



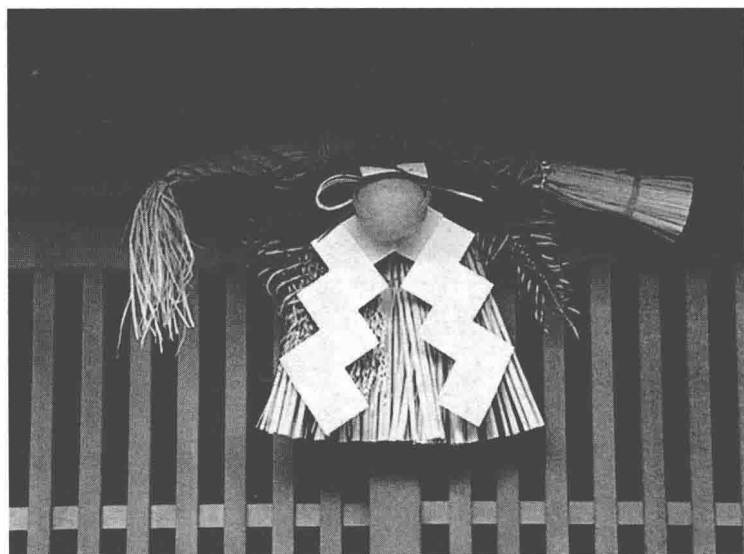
歳神(年神)を迎え、依り着く代物として門口に左右一対で立てる

ことが多い。写真は広島県竹原市の伝統的建造物群保存地区に立てられた門松

また、31日に門松を立てることを「一夜飾り」と言い、これは正月を迎えるまで間がないために、慌ただしい思いをさせては神様に失礼になるばかりか、せっかく来られた神様がゆっくりできない、といった理由から避けた方がよいと考えられている。とは言え、最近はこうした風習を守る人は、少なくなりつつある。

## ▶▶ (2) 注連縄

注連縄とは、神事を行ったりする神聖な場所と、私達人間の住む下界とを区別するために張る、藁でできた縄のことである。漢字で「注連縄」と書き表すが、これは中国の「注連」というものに由来しているからだと言われている。その「注連」とは、神聖な場所に死霊が入り込まないように、水を注いで清めた縄を連ねて張ったものを指すのだそうである。

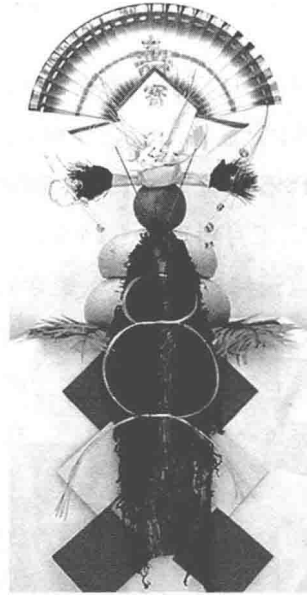


悪霊の侵入を防ぐ意味もある注連縄は、正月には意匠を凝らした注連飾りとして門口などに飾られる

正月には、神社や家々の入り口に注連縄や注連飾りが吊るされる。魔よけの意味がある。しめ縄は神を迎える清浄な場所を示すために張るものだが、そのしめ縄に橙やシダ、伊勢エビなどの縁起物を付けて作った飾りがしめ飾りである。橙は子孫の繁栄を意味するなど、縁起物はそれぞれ意味を持っている。正月が終わると門松などと一緒に神社へ持って行き、焼いてもらう。

### ▶▶ (3) 鏡餅

鏡餅とは、正月などに神仏に供える丸くて平たい餅である。10～20センチくらいの大小2つの餅を重ねて供える。正月には床の間に飾り、神仏に供える。地域によっては餅を三枚重ねたり、二段の片方を紅く着色して縁起が良いとされる紅白としたもの(石川県で見られる)、餅の代わりに砂糖で形作ったもの、細長く伸ばしたものを渦巻状に丸め、とぐろを巻いた白蛇に見立てたものなど様々なバリエーションが存在する。日本には、正月には年神という尊い神が家々を訪れるという古い信仰があり、その年神に鏡餅をお供えして



正月に迎える歳神(年神)に供える。重ね餅にするのは福德が重なり縁起がよいためといわれている。ダイダイ、昆布、ウラジロなどを添え、扇や紙垂、水引などを飾る。重ねる餅の数や用いる飾りはさまざまである

まつというものがもともとの意味であった。しかし最近ではそのようなことを意識する人は少なく、鏡餅も正月飾りの一部と考えられている。

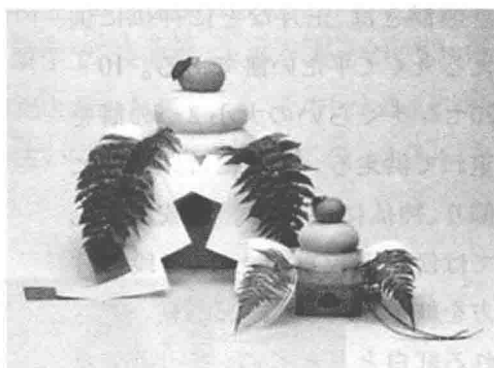
### ▶▶ (4) 鏡開き

鏡開きとは、床の間に飾っておいた鏡餅を1月11日に下ろして、食べる行事である。元来は20日に行われていたが、1651年1月20日に徳川幕府三代將軍家光が亡くなったため、11日に改められたといわれている。11日になると、鏡餅は固くひび割れてくるが、縁起物なので刃物で「切る」ことを避け、手か槌でたたいて割る。餅が割れて開くから鏡「開き」といわれるのである。

# ▶▶ (5) お節料理

御節料理は、節日(節句)に作られる料理である。特に、正月に備えて年明けまでに用意されるお祝いの料理(献立)を指す。おせち、正月料理ともいう。

漆塗りの重箱には、口取り、焼き物、煮物、酢物の物など



が色とりどりに盛りつけられる。見た目が豪華である上、長持ちするのが特徴で、三が日は主婦の家事が軽減されるようにという配慮もあって、現在のおせち料理ができあがったようである。地方によって多少の違いはあるが、おせちの中身はだいたい決まっている。鯛は「めでたい」、数の子は「子孫繁栄」、昆布巻は「よろこぶ」

といったように、おせちの中身にはそれぞれ願いが込められている。

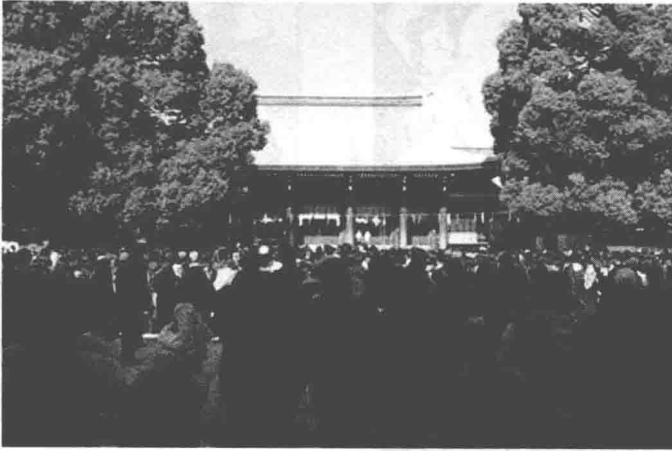
お節料理は、三つ肴(関東では黒豆、数の子、ごまめ(田作り)の三品、関西では黒豆、数の子、敲き牛蒡の三品)と呼ばれる三品の料理の他に、様々なお祝いの料理で構成される。



「めでたさを重ねる」意味から、縁起がよいといわれる料理を重箱に詰める。写真は簡便な二段重ねの例。正式には四段重ねである。

▶▶ (6) 初詣<sup>はつもうで</sup>

新年最初の神社へのお参りは初詣と呼ばれ、全国的に見られる正月の習慣の1つである。正月の間に、人々は家族や友人と連れ立って、神社や寺院にその年最初の参拝初詣をする。その年の神様の加護と幸運を願って、神社へお参りする。



明治神宮の初詣

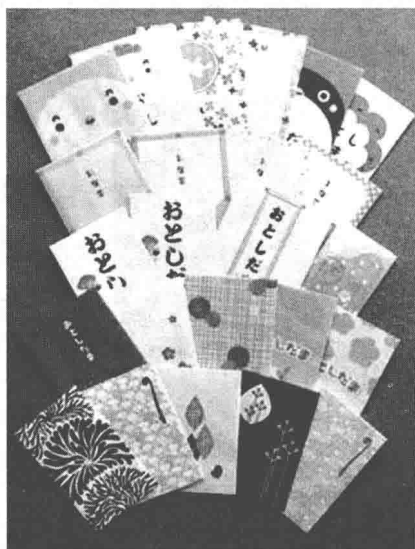
一般的には三が日の間にするが、関東では1月7日、関西では1月15日に、松飾りを取り外すまでにお参りをすれば良いとされている。

参拝者が最も多いのは、東京の明治神宮である。二番目が神奈川県にある川崎大師、三番目が千葉県にある成田山新勝寺である。

▶▶ (7) お年玉<sup>としだま</sup>

お年玉は、正月に新年を祝うために贈答される品物のことであった。現在では子供に金銭を与える習慣及びその金銭の意で用いられることが多い。金銭でなく菓子などを与える地方もある。年末に贈られる歳暮と異なり、目上の者が目下のものに贈るのが特徴である。これをもって年の賜物であるから「としだま」という名がついたという説がある。また、古くは餅玉を与えたために「年玉」の名前がついたともいう。

「たま」とは、「たましい」のことであり、「としだま」とは新年を<sup>つかさど</sup>司る<sup>とし</sup>年神<sup>そな</sup>への<sup>もの</sup>供え物の下げられたもののことであると民俗学的には説明される。供え物には<sup>まつ</sup>祀った神霊の分霊が宿るとされ、それを頂くことにより、人々は力を更新して新たな一年に備えるのである。



年玉の習慣は中世にまでさかのぼり、主として武士は太刀を、町人は<sup>おうぎ</sup>扇を、医者<sup>が</sup>は丸薬<sup>やく</sup>を贈った。

近年、中学生や高校生が5,000 円や1 万円のお年玉をもらうことも珍しくない。お年玉の総額が何万円にもなることもある。

## ▶▶ (8) <sup>ねんがじょう</sup>年賀状

<sup>ねんがじょう</sup>年賀状とは新年に送られる葉書やカードを用いた挨拶状のことである。新年を祝う言葉を<sup>も</sup>以ってあいさつし、旧年中の<sup>こうぎ</sup>厚誼の感謝と新しい年にならぬ厚情を依頼する気持ちを、また、親しい相手への場合などには近況を添えることがある。

日本に近い<sup>かんこく</sup>韓国、<sup>ちゅうごく</sup>中国にも似た風習がある。<sup>おうべい</sup>欧米などではクリスマス・カードで新年の挨拶も済ませてしまうので、年賀状の文化はほぼない。



### 3. 節分

節分は、各季節の始まりの日(立春・立夏・立秋・立冬)の前日のことである。節分とは「季節を分ける」ことをも意味している。特に江戸時代以降は立春(毎年2月3日ごろ)の前日を指す場合が多い。節分は宮中での年中行事であった。この日の夜、人々は炒った大豆を家の内外にまきながら、「鬼は外! 福は内!」と唱える。その年の健康を祈り、大豆を自分の年の数だけ食べるという習慣もある。また、寺や神社でも大がかりな豆撒きが実施される。この豆撒きは、家から邪気を追い出して災厄を祓い、福つまり幸福を呼び込むために行われると言われている。